

武蔵野日曜集会

幸いなる哉見ずして信じる者

――ヨハネ伝第20章24節～21章14節――

1985年4月14日

小池辰雄

見るまでは信じない 霊体と魂体 主なり 見れども見えず 見ずして信ずる 信仰は現実
聖霊の現実 根源現実

【ヨハネ20・24～21・14】

²⁴ イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、²⁵ 他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマス言う『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらざれば信ぜじ』

²⁶ 八日ののち弟子等また家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じ置きしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』²⁷ またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさし入れよ、信ぜぬ者とならで信ずる者となれ』²⁸ トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』²⁹ イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸福なり』

³⁰ この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。³¹ されど此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

¹ この後、イエス復テベリヤの海辺にて己を弟子たちに現し給う、その現れ給いしこと左のごとし。² シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに居りしに、³ シモン・ペテロ『われ漁獵にゆく』と言え、彼ら『われらも共に往かん』⁴ と言ひ、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。⁵ 夜明の頃イエス岸に立ち給うに、弟子たち其のイエスなるを知らず、⁶ イエス言い給う『子どもよ、獲物ありしか』彼ら『なし』と答う。⁷ イエス言いたもう『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』すなわち網を下ろしたるに、魚夥多しくして、網を曳き上ぐるに能わざりしかば、⁸ イエスの愛し給いし弟子、ペテロに言う『主なり』シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸なりしを



上衣をまといて海に飛びいれり。⁸ 他の弟子たちは陸を離るること遠からず、
僅に五十間ばかりなりしかば、魚の入りたる網を小舟に曳き来り、⁹ 陸に上
がりて見れば、炭火ありてその上に肴あり、又パンあり。¹⁰ イエス言い給う『な
んじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』¹¹ シモン・ペテロ舟に往きて網を
陸に曳き上げしに百五十三尾の大なる魚満ちたり、斯く多かりしが網は裂け
ざりき。¹² イエス言い給う『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『な
んじは誰ぞ』と敢えて問う者もなし。¹³ イエス進みてパンをとり彼らに与え、
肴をも然なし給う。¹⁴ イエス死人の中より甦えりてのち、弟子たちに現れ給
いし事、これにて二度なり。

●見るまでは信じない

(英語の讃美歌『Nearer, my God, to Thee』(320番「主よみもとに」)を独唱。タイタニック号
の沈没の話省略)

²⁴ イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居ら
ざりしかば、

「デドモ」というのは「双生児」という字です。このトマスというのはこの時にいなかった。

²⁵ 他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマス言う『我はその手に釘の
痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらずば
信ぜじ』

この「信ぜじ」はギリシア語では特に「ウー・メー」と書いてあつて、これは「断じて信
じない」と非常に強い。トマスは非常に疑い深いやつだな。よくあるよね、なかなか信じ
ない人が。見るまでは信じないと。

ルカ伝24章33節から、

「³³ 斯て直ちに立ちエルサレムに帰り見れば、十一弟子および之と偕なる者あ
つまり居て言う、³⁴ 『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵ 二人の者
もまた途にて有りし事と、

「二人の者」とはエマオ途上の二人です。

パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶ 此等のことを語る程
に、

エマオの途上でキリストにでつくわした二人が語っているうちに、イエスが、戸が閉まっ
ているのに入ってきた。

イエスその中に立ち、『平安なんじらに在れ』と言ひ給う。³⁷ かれら怖じ懼れ
て見る所のものを霊ならんと思ひしに、

幽霊だと思つた。



38 イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑^{うたがひ}おこるか、39 我
が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、

触つてみると、今度は。

霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』40 斯く言いて手と足
を示し給う。41 かれら^{よろこび}歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、
まだ怪しんでいる。ま、そうかもしれないね、これ。

イエス言い給う『此処に何か食物あるか』42 かれら炙りたる魚一片を捧げた
れば、43 之を取り、その前にて食し給えり。』（ルカ24・33～42）

復活のキリストが、戸を閉じたところから入ってきて、そして

「私に触つてみる。食べるものがあつたら食べてみせるぞ」

と。大変なことです、これは。

大体、これはみんな信じない。神学者も牧師さんも、物語くらいにしか思わない。ある
神学の聖書研究のグループ――錚々たる連中です。私はその一員だったんだけど――
みんな笑っているんだ、このところを。それから私はしやくにさわったから、その群か
ら出てしまった。「何だ!」というわけだね。もう我々の判断で解るようなことではないで
すよ。こういうキリストですから。だから、申し上げているとおり、

「降参しなければ、その世界に入れませんよ」

ということ。見ても信じないんだ、彼らは。ただ怪しんでいる。

「おかしいな。手で触つてみなければダメだ」

と。トマスもそれ式なんだ。

●霊体と魂体

26 八日ののち弟子等また家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じ置きしに、
ここもそうです。ヨハネ20章19節でも、「戸を閉じおきしに」でしょ。

イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』27 またト
マスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、
我が脅にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信する者となれ』

トマスは何も会話してない。会話してないけれども、トマスというのはそういう疑い深い
やつで、こんなことを前に言ったということをやちゃんとキリストはもう聞いてしまってい
るんだ、霊の耳で。大変なひとですよ。だから、トマスに先んじて、

「お前はそんなことを言ったようだが、では触つてみる」

と。それで今度は、トマスはびつくりしてしまった。

28 トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』29 イエス言い給う『なんじ我を
見しによりて信じたり、見ずして信する者は幸福なり』



今日の題は、この「幸いなる哉見ずして信する者」です。普通はみんなこれですよ。それからまた、聞いても読んでも、なかなかそれを本当にしない。だから、聖書に蹟く。キリストはもう完全に霊体です。幽霊ではない。「血気の体あり、霊の体あり」とパウロがコリント前書15章で言っているのがこのことです。

「^{よみがえり}死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、⁴³卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、⁴⁴血気の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。血気の体ある如く、また霊の体あり。」（コリント前15・42～44）

これです。だから、我々は肉体が亡びると、その次には「霊の体」に甦らされる。「血気の体」というのは「ソーマ・プシコーン」といい、「ソーマ」というのは「体」ということです。「霊体」は「ソーマ・プネウマティコン」です。「血気の体」は直訳すると「魂体」です。「魂」は「プシヘー」ですからね。魂体が今度は霊体になるわけだ。「靈魂」という言葉があるからおもしろいね。霊体と魂体。我々は今は魂体なんです。

キリストは霊の体をもつて現れてきた。霊体というのは、戸が閉まっていようが入ってくる。X線よりか凄いんだ。非科学ではない。超科学の世界ですよ。いわゆる科学的な実証よりももうひとつ凄い現実の実証をしているわけです。何でも科学的でなければ受けとらない人は、もうひとつ上の次元のことは全然わからない。だから、キリストが、「五感でもつて見たり聞いたりして信するくらいではダメだ。見ずして信じろ」と言われる。

「理屈にあわないから信じない」

なんて、理屈にあうような神さまではないんだ。理屈を越えてしまっている世界です。

「不合理なるがゆえに我信ず」

という言葉もあるくらいですから。

³⁰この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行い給えり。

まあ大変だ、たくさんあった。

³¹されど此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが為なり。

「御名により生命を得る」の「よりて」は、「彼の御名にあつて」という「エン」です。

●主なり

「この後、イエス復テベリヤの海辺にて己を弟子たちに現し給う、

ティベリウスというローマの皇帝の名前から、ガリラヤ湖のことを「テベリヤの海」なんていう言い方をする。あるいは、「キンネレテの海」ともいう。

その現れ給いしこと左のごとし。²シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、



ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら
「ゼベダイの子ら」というのはヤコブとヨハネ。

及びほかの弟子二人もともに居りしに、³シモン・ペテロ『われ漁獵^{すなどり}にゆく』
と言え、彼ら『われらも共に往かん』と言ひ、皆いでて舟に乗りしが、そ
の夜は何をも得ざりき。

いつかもこんなことがあつたね。また同じようなことが起きた。ペテロは一生懸命にキリストに従つて、「そのうちに伝道を」とキリストに思われている人物なんだけれども、キリストがいなくなつたら、また元の漁師に戻つてしまつて、漁に行くなんておつ始めた。まだ本当に聖霊を受けてないものだから、すぐ後戻りする。

⁴夜明の頃イエス岸に立ち給うに、弟子たち其のイエスなるを知らず、

これがわからない。エマオ途上のあれと同じです。

⁵イエス言ひ給う『子どもよ、

「子どもよ」という面白い言ひ方をするね。「育てることを要するもの」という字です。まあ、親しい言ひ方でしょう。

獲物ありしか』

「何か、魚はとれなかつたか？」

という言ひ方です。口語訳では「食べるもの」となっているが、そうではない。「魚」という字です。

「何か、魚がとれたかね。とれなかつたかね」

と。キリストは、とれないことを知っているんだ、ちゃんと。だから、「とれなかつたかね」という言ひ方をしている。そうしたら、

彼ら『なし』と答う。⁶イエス言ひたもう『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』

ちゃんと「魚」と書いてあるのに、どうして「獲物」なんていう訳し方をするのかな。

すなわち網を下ろしたるに、魚夥^{おびただ}しくして、網を曳^ひき上ぐる^{こと}能わざり

しかば、⁷イエスの愛し給ひし弟子、ペテロに言う『主なり』

前にもそういうことがありましたから、また我々の主がそんなことをなさつたというわけで、ヨハネがペテロに「主さまだ」と言う。

シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸なりしを上衣^{うわぎ}をまといて海に飛びいれり。

これはシモンらしい。飛び込んでキリストの方に向かつて行つたわけです。

⁸他の弟子たちは陸^{おか}を離るること遠からず、僅^{わずか}に五十間^{けん}ばかりなしかば、

「五十間」というのは、ギリシア語では「二百テークス」といつて、「テークス」というのは肘から手の指の先までが「一テークス」です。ノアの方舟を測るのも、それで測っている。「腕」



という字です。大体、45センチメートルと註解にありましたけれども。90メートルくらいになる。

魚の入りたる網を小舟に曳き来り、⁹陸に上がりて見れば、炭火ありてその上に肴^{さかな}あり、又パンあり。¹⁰イエス言い給う『なんじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』

キリストがこれを用意していたのかね。まあ、命じたか、キリストもなさったか。

¹¹シモン・ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げしに百五十三尾^びの大なる魚満ちたり、

「百五十三尾」というんだから、ちゃんと数えたね、これ。

斯く多かりしが網は裂けざりき。¹²イエス言い給う『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『なんじは誰ぞ』と敢えて問う者もなし。¹³イエス進みてパンをとり彼らに与え、肴^{しか}をも然なし給う。¹⁴イエス死人の中より甦えりてのち、弟子たちに現れ給いし事、これにて三度なり。

みんなが居る所で部屋の中に一度現れて、それからエマオ途上で、そして今度で、三回というわけです。書かれないことでもつとあるかもしれませんね、もちろん。

●見れども見えず

ところで、

「見ずして信する者は幸いである」

という。「見れども見えず」というのがあるね、あのイザヤ書に。

「見れども見えず、聞けども聞こえず」

とイザヤ書にある。42章、

「¹⁸みみしい聾者よきけ、^{めしい}聾者よ眼をそそぎてみよ。

これは本当の「聾者、聾者」ということではなく、「聾者と同じようなお前たちよ」ということ。

¹⁹聾者はたれぞ、わが僕にあらずや。

イスラエルの民だと。

誰かわがつかわせる使者^{つかい}の如き聾者あらんや。誰かわが友の如きめしいあらんや。誰かエホバの僕のごときめしいあらんや。²⁰汝おおくのことを見れども顧みず、耳をひらけども聞かざるなり。」(イザヤ42・18～20)

ここにもありますね。まだ他にもあります。イザヤ書6章に、

「⁹エホバいいたまわく、往きてこの民にかくのごとく告げよ、なんじら聞きてきけよ然^{され}どさくらざるべし、見てみよ然^{され}どしらざるべしと。¹⁰なんじこの民のこころを鈍くし、その耳をものうくし、その眼をおおえ、恐らくは彼ら



その眼にて見その耳にてききその心にてきとり 翻^{ひるが}えりて医^いさるることあらん(彼らその眼にて見その耳にてききその心にてきとり 翻^{ひるが}えりて医^いさるることなからんためなり)。(イザヤ6:9～10)

これは、

「恐らく彼ら……医さるることあらん」

ではない。訳が間違っている。

「彼ら……医さることなからんためなり」

です。だから、見ても見えない。聞いても聞こえない。心にて翻らない。そして、医されることがなからんためであつて、それほどまでに心が鈍くなっているということです。

論語の中にもある。

「読めども読めず、見れども見えず」

と。話を聞いても、一向それが体の中に入って来ないという方があれば、それと同じことだ。聞けども聞こえずというやつ。そつぽなんだ。本当に聞いてない。眠っているわけではないけれども、聞けども聞こえず。まあ、福音はみんな大体そういうことなんです。聖書を読めども読んでない。

「論語読みの論語知らず」

と同じことで、

「聖書読みの聖書知らず」

ということ。

●見ずして信ずる

ところが、トマスはとにかく見た、触った、そうしたらやつと信じたという。目と耳と手。

「つらつらこれを目にて見、耳にて聞き、手にて触りし神の言」

という言葉がヨハネ書簡の中にある。それで信じたというのは――「信ずる」という言葉はおかしい――「信じた」というのは「本当とした」ということだ。ヘブル書11章に、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」(ヘブル11:1)

とある。これとキリストの言葉が同じことになる。「確信し」という訳はあまりよくない。

「信仰は望んでいるところのものを現実となし、見ぬところのものを確証とする。」

ということ。信仰というものは望むところのものを現実とし、見ないものを確かなものとする。要するに、どっちも現実ということだ。それが本当の信仰だと。だから、ヘブル書11章1節が、

「見ぬものを信ずるものは幸いなり」

とキリストが言われたのと同じ内容になる。信仰は望むところのものを、見ないものを現



実とし確証とする。確かなる証とする。

「何か五感に訴えないければダメだ。科学的にそれが証明されなければダメだ」

とかいうのが、今の若い人たちの大体の傾向なんだ。そうでなくても、非常に頑固な人間はなかなか疑い深くて信じない。

私なんかは信じ過ぎて、ちよつと困る方だけれども。簡単に信ずる。だからまた、ばかされてしまう。大体、内村先生の話聞いて、私はキリスト教に入ったでしょ。それから私は信仰の世界で疑ったことがないものね。ずーつとまっすぐに来てしまった。

「もう聖書はよそう」

なんて思ったこともないし。非常に簡単なんだよ、ぼくは。非常に簡単にものを信じてしまふ。非常におめでたい人だ。

「子どもは大人の父である」

と、ワーズワースの詩の中にある。

「おきな幼児のごとくならずば天国に入れない」

とキリストが言われた。だから、キリストもまた「幼児のごとく」なんです。童心なんです。童心にならなければ、童心を持たなかったら、信仰の世界はダメです。

「幸いなる哉、見ずして信ずる者」

という。この「見ずして信ずる」というのは

「しかたがないから、信じておこう」

なんて、そんなのではない。見ないけれども、その見ないものを現とする、うつつとする、現実とするということだ、「信ずる」というのは。ということは、肉の目で見ずして、霊の目で見ること、霊視するわけです。キリストは正にその霊視者なんです。みんなは見えないんだ。お魚がとれない。ダメなんだ。ところが、お魚があるのをちゃんとキリストは見ている。霊視しているから、

「そこに網をおろせ」

と。そうしたら、大漁になった。それでみんなびっくりするわけです。

●信仰は現実

嵐で沈むばかりの舟の中で弟子たちはもう恐がっている。

「信仰なきものよ、なんぞ疑うか」

と。キリストは、

「静まれ！」

と言う時に、既に静まっているところの海をちゃんと見ているわけです。先を見越している。そして、今あるところの現実に対してもっと凄い現実を見て、そいつを受けとっていくのが、これが「信ずる」ということです。



「祈られたことは聞かれたりませよ」
でしょ。

「祈ったことは既に聞かれたという完了の現実をすぐ受けとれ」
というんです。

「それは聞かれるだろうか、どうだろうか？」

ではないと。私利私欲のことはダメだよ。神さまの方に即した角度から、

「あの人をなんとか救ってやろう」

と。救われたる相手をちゃんと見ているわけです。今そうならないかもしれない。いろいろな事情で。けれども、

「必ずそれは救われる」

という未来完了を現在完了として見る。それが「信ずる」ということ。

「あいつはもうしょうがない野郎だけれども、今に救われる」

と、相手のことを祈りかかっていくと、その祈りが今度は、その知らない人に力となつて働くわけです。人のために祈るときには、そういうようにして、試験に及第するなら及第したことを、勉強なら勉強ができることになっている、その現実を祈りこんであげることです。だから、

「相対的現実において見なければ信じない」

なんていうのはおよそダメなんで、本当は信仰に入らない。トマスがやっと気がついて、

「わが主よ、わが神よ！」

なんて言っただけでも。その「わが主よ、わが神よ」は結構な告白ですよ。

「キリストは、自分をこんなにして救ってくれた。参りました！」

と。「わが主よ、わが神よ」と言うときには、

「本当に参りました！」

と言わなくては、これは言えないんです。神があるとかないとかということではない。

「私の主であり、私の神である。参りました。降参しました！」

と言うときに、この言葉が発せられるわけです。

だから、もう常に未来を先取りしている。「未来」はむしろ「将来」と言った方がいい。将来は、「将来に來らんとする」という。「未だ來らず」なんていうのではない。将来というものを現実化する。だから、

「信仰はうつつだ」

としょっちゅう申し上げているのはそのことなんです。現実なんです。信仰は現実である。

●聖霊の現実

自分をキリストの中に投げ込んで、キリストの中に入ってしまったって、



「こつち（私の側）にはいませんよ、こつちにはありませんよ」

という、これが「無我」なんだ。私の言う「無我」はいわゆる悟った無我ではない。

「我を探そうと思ったら、キリストの中に入って来てみる。この中に入ってこなければわからんよ」

と。ここに「無者小池」がいるわけです。こつちにはいない。だから、キリストは外からは見えないんだ。キリストの中は外から見えない。キリストを見ようと思ったたら、自分も中に入らなければ見えない。そうしたらもう凄いことになる。もうそのときは、

「われもなく世もなく、ただ主のみませり」

と。キリストの中に祈り込んで自分が入ってしまうと、この本当の現実が出てくるんです。だから、「祈りたるもの」は、

「祈り入りたるものは聞かれます」

ということ。祈りしなくては。祈り、帰入です。

そのような信仰を未だかつて聞いたことがないんだよな、私は無教会でも。内村先生が何か所でちょっと似たことを言ってる。『一日一生』という中の「5月31日」のところ。あれは先生の言葉で一番好きな言葉だ。けれども、あそこにやはり聖霊が出てこない。そういう世界がもの凄い聖霊の現実だということです。だから、「我を視よ」ということになる。ペテロやヨハネやパウロが、

「我を視よ」

と言えたのは、この中に入ったときの「我」なんです。そうしたら、

「わがうちにあるものを汝に与う。イエス・キリストの名によりて歩め」

と言ったら、生まれつきの跛者が立つてしまった。もの凄い力が働く。だから、

「使徒たちの次元に限りなく入りましょう。これが本当の宗教改革だ」

と言っているわけです。誰が何と言ったって、私は承知しないから。これはもう死に至るまで叫んでいく。無教会の人はただ

「十字架の贖い」

というような命題ばかり言っている。「罪の贖い」なんて、ただそんなことばかり言っている。ヒルティさんは、このヨハネ的な現実を非常につかまえている。

「神さまの息吹がかかってきたら、人間の思想体系なんていうものは蜘蛛の巣のようになんて破られてしまぞ」

なんて、おもしろいことを言っている。

まあ、キリストは神さまの中に本当に入っているから、神の力が、神通力、千里眼、何でも働いてしまう。キリストというひとは大変なひとだ。それはお釈迦さんだってかなわない。孔子なんかももちろんかなわない。

「世界の四聖」



なんていったって、キリストは次元が違う。これはもうはつきり告白していきます。ベートーベンは何をなさつてもいいけれども、とにかく、その絶対的な境地に魂が触れていなくつよりかもつと素晴らしい作曲ができてしまった。

「目の見える人は不自由だ」

なんて、^{はなわ}塙保己一が言う。本当にその世界に徹している人はみんな同じです。どうぞ、あなた方は何をなさつてもいいけれども、とにかく、その絶対的な境地に魂が触れていなくては。触れていれば何がどうなつても展開していきます。だから、そういうことをやっていけないと。私だつて、これから12年かかつて大きな詩を書くなんていう大法螺^{ほら}を吹いているけれども、その大法螺は最後の現実をちゃんと見ているから、私ははつきり言うんです。

「書けるだろうか？」

なんて絶対に思っています。現にもう書いているからね。内村先生を思えば、70節の詩ができてしまつたりする。

●根源現実

「魚」という字はギリシア語で「イクトウス」という。これはその当時の暗号なんです。魚の印はキリストを表わしている。これは

「イエス・キリスト・テウ・フオス・ソーテール」

「救主なる神の子イエス・キリスト」

の頭文字です。「魚」はキリストの暗号なんです。迫害されるからね、魚を書いていると何のことかわからない。しかし実際、キリストはお魚をこうやってたくさん食べさせてくれたから、お魚をくださる人というわけだ。そういう暗号で、初代教会の人はこの「イクトウス」をキリストの暗号として使ったということです。だから、

「我を食らえ、我を飲め」

でしょ。なにもキリストの肉を食べやしない。キリストの霊肉を食べ、キリストの霊の血を飲む。これが聖晚餐ですよ。最後の晚餐で葡萄酒を飲みパンを裂かれたけれども、それはキリスト自身を、

「本当にキリストの生命を受けとれ、体で受けとれ」

ということ。我々はキリストを見ることが同時に食べることになり、見ることが同時に飲むことになる。だから、それがみんな信仰の現実なんです。現信、信現——こんな言葉はないけれども——これが信仰の現実です。

私は不思議でね、大学時代から、この「現実」という言葉が非常に好きだった。藤井先生が、「理想、理想」と言っていた。

「理想と現実で、理想を追求しなければいかん。現実を踏み越えて」



と。『理想』なんていう雑誌は本当は「現実」とした方がいい。もうひとつ先の世界なんだ。理想を追い求めているうちはダメなんです。理想を、キリストという理想を現実にしなくては。現実を受けとらなくては。ドイツの詩人シラーは、どちらかということ、非常に理想主義的な傾向が強い。ゲーテは現実の詩人なんです。

「神のうちに生き動きまた在るなり」

という方です。そういうことは我々でなければ、ゲーテのよきなんかはわからない。ドイツ文学者はたくさんいるけれどもダメなんだ。そういう現実の世界、「ビルクリッヒカイト」(現実)です。ゲーテはそれに「ウル」を付けて、「ウルビルクリッヒカイト」「根源現実」と言った。私は根源現実と言ったが、ゲーテもちゃんと使っているよ。「ウルフェノメノン」(根源現象)だとかね。

その根源現実の中に私たちは生きている、呼吸している。これが本当の信の世界です。本当の信仰とは根源現実において生きているということ。キリストという根源現実の中に生きている。こちらが破れていようが、破れてなかりうが、そんなことは問題じゃない。そして、その根源現実を受けとると、相対的現実でも、たとえば病気をしていれば、どんどん病気が治っていく。

キリストなんていうのは、そういうことで、本当に神の現実の中を生きていたひとだから、私たちはキリストの現実の中に生きなかつたら、何の信仰かと。全部、先取りしてくださいよ、ぐつと。キリストは決して空手形ではないですから。

「そのうちにそうなるでしょうか？」

ではない。「そのうちに」ではない。今、直ちにだ。

「幸いなるかな、現実^に我を受けとるものは」

と。こういうわけです。

「見ずして信ずる」

なんていう言葉もまだ、まだるっこいくらいなものです。こういう言葉は普通はただ、

「そうか、見えないけど、では、仕方がない。信じておこう」

なんて、それくらいなものだ。そんな信じ方をしたって何にもならない。私が今言ったとおりに現実^にいなければ。現実の中に自分が入らなくては。だから、

「もう私の姿なんかは在れどもなきに等し」

というわけだ。

そういう境地に入つて、福音書を読んでごらん。もう福音書くらい楽しいものはない。大変、どうも乱暴に言いましたけれども、しかし、これは本当ですから。見ないで見ている。聞かないで聞いている。ベートーベンと同じ。食べないで食べている。飲まないで飲んでいる。そういう現実です。まあ、そういうようにキリストの中に入ると、空気がいいだ。おしまい。

